

「はぁ・・・」

「悪いんですけど今からそちらにお伺いしてもいいですか？」

「罰ゲームかなんかですか？」

「いえ、個人的な用件と言いますか、仕事なんです」

「そうっすか・・・いいですけど別に」

「ありがとうございます、15分ほどで着きますのでお願いします」

そう言って電話は切れた。

電話を掛けた方から切るといったマナーを守っているなど考えつつ自称メリーさんを待つことにした。そしてぴったり15分後にもう一度着信音が鳴った。

「もしもし」

「私メリー。今あなたの後ろにいるの」

一章「すみません、私メリーと言う者なんですけど・・・」

振り返るとそこにはずぶ濡れの女が携帯を手に正座していた。

「・・・」

「・・・驚かないんですか？」

「驚いてますよこれでも、でもあまりに普通なんです」

そこに正座していたのは街中で見かけるような女、というか女の子と言った方がいいだろうか？

スカートを履いているが今流行のレギンスが見えている。

服装はZipper系とでもいうのだろうか？

女の子の服装はよくわからない。

「メリーさんってあれですよ妖怪と言うか幽霊の・・・」

「はい、そうですメリーさんです」

「どう見ても日本人にしか見えないんですけど」

髪型はショートカット、黒髪が雨に濡れて黒々と光っている、まさにカラスの濡れ羽色とでも言うのだろうか。メリーさんは黒々とした瞳でこっちを見つめている。

「ああ、これは役職なので私に割り振られたのがメリーさんなんです」

「職業なの・・・？」

「はい、ちなみに生前は中山です」

死んでからもいろいろあるんだなと僕は思った。

「それで中山さん、どうして家に？」

「あ、メリーでお願いします。今日ここに来たのはあなたに驚いてもらう予定だったんですが・・・」  
驚いてませんでしたよね・・・と下を向いてメリーさんは落ち込みました。

「仕事って言ってたけど驚かすのが仕事なの？」

「はい、そうなんですけどまあ自分の為ですね説明すると長くなるけどいいですか」

「いいけど、どうせ暇だし」

せっかくの休日を雨に邪魔されどこへも行けない僕にはちょうどいい暇つぶしだ。

この自称メリーさんに付き合う事にした。

メリーさん曰く死後はこんな仕組みらしい。

死んだら成仏するかこの場に残留するかを選ぶ事ができる。

成仏するを選べば死後の世界とやらにいけるらしい。この場に残留を選べばこの世に留まる事ができる。しかし、その場合ある条件があるのだ。

「役職に付き人を驚かす事」

有名な妖怪から地方の噂までピンからキリまである役職のどれかに割り当てられ、人を驚かす事でこの世への滞在時間を稼ぐらしい。

「私に割り当てられたのはメリーさん、1人驚かすごとに14日の滞在期間がもらえます」

「結構シビアな世界だな」

「有名になるほど報酬滞在期間も少なくなるんです。トイレの花子さんなんて一人あたり3日ですよ」

「切ないな花子さん」

この世に留まる事を選んだ人は大抵この世に未練があり果たせなかった事、恨みなどを晴らすために必死で人を驚かすのだという。

「そこで、あなたに驚いていたいただきたいんです。形だけでいいんで」

「はぁ・・・形だけでいいんですね？」

「いいんです」

後ろを向くようにと促すメリーさん、しぶしぶ後ろを向くと携帯電話の着信音が鳴り響いた

「もしもし」

「私メリーさんあなたの後ろにいるの」

すぐ後ろで聞こえる声と携帯から聞こえる声がほんの少しずれて聞こえておかしい感じがした。

そして振り向くとさつきと同じ姿勢のメリーさんがアイコンタクトをとってきた驚けという合図なんだろう。

僕は迫真の演技で驚きを演じた

「う、うわーびっくりしたー」

「・・・」

「・・・」

「はい、OKです。ありがとうございます」

「変なところがアバウトだな」

驚きの審査基準を聞いてみたいものだ、きっと驚くほど適当なんだろう

「あ、ちゃんと14日加算されてます」

携帯で確認するメリーさん、あの世も電子化が進んでいるらしい

「それより濡れたままで平気か？」

「あくちよつと寒いですけど平気です」

「ちよつと待ってろ」

そう言つて1階へと降りる、タオルを取りにだ。

女の子はいたわれ。親父から毎日のように言われていた言葉だ、たとえ幽霊であっても女の子なのだ。

バスタオルとついでに紅茶も持っていく事にした。チョイスは上質のアルグレイ、俺のひそかな楽しみを分けてやることにした。

右手にマグカップ、脇にバスタオルを抱え自分の部屋へ入るとメリーさんがベッドの下を覗いていた。

ドアが開く音に気づいたのか慌ててメリーさんが最初に座っていた位置へ戻り、何もなかったかのような顔でおかえりなさいと言った。

「何してたの？」

「い、いや！そのっ男の子の部屋に入るのは初めてでして、そっそのやっおぱりあくいうものがあるのかなと思ひましてっ」

声が裏返っていたりごによごによ後半は聞き取りづらかったがあまりにも必死だったので文字通りタオルを投げてやることにした。

甘いな、俺の隠し場所は鍵付きの引き出しの中だしかも一枚の板の下。

その上特殊なあけ方をしないと燃えてしまう。ベッドの下など馬鹿のやることさ。

それはさて置き片手のマグカップをメリーさんへ差し出す。

「あったかい紅茶」

「ありがとうございます、ご親切にどうも」

ここでこの紅茶が高いだの有名なものだといわないのがコツだ。純粹に感想を聞きたいが為だ。紅茶好きの血が騒ぐ。

メリーさんはマグカップを受け取りそのまま口へと運んだ

一口啜るとマグカップをおいた。

「ところで、相談があるのですが・・・」

おいしいの一言も無しか。残念。ちくしようと一人で落ち込む。

髪をタオルで拭きながらメリーさんは続ける。

「実は、驚かすのはあなたが初めてなんです。いつもは最初に電話した時に断られてしまつて・・・」

それはそうだろう、いちいち断りをいれずに強引にくれればいいのだろう。律儀な奴だな。

承諾するのは僕かよっぼどの寂しい奴だろう。

「それで・・・どうしたら驚いてもらえるようになると思いますか？滞在期間を稼がないといけないんです」

「突っ込むところが多すぎてどこから直せばいいかわからないけど」

「それじゃあ最初からお願いします」

お願いと言われると断れない僕。流されやすいなと思いつつ協力することにした。

「まずだ、その丁寧語を何とかしろ、腰の低い幽霊なんてどこにいる」

「こっちからお伺いするのに相手に失礼じゃないですか！」

思わぬ逆ギレ、戸惑う僕。

「次に服装だ。なんで流行の最先端なんだ」

「幽霊がオシヤレしちゃいけないんですか？女の子の楽しみなんですよ？」

女の子と言う単語に弱い僕。オシヤレしたいのはしようがないと妥協することにした

「脅かす時に笑顔もやめた方がいい」

「じゃあ、どういう顔してたらいいんですか」

「恨めしそうな顔で脅かせばいいじゃないか」

「恨めしくないですもん」

「直す気あんのか！」

その後も小一時間欠点の克服に務めたがどうにも引き下がる事は無く、結局は今のままで行く事になった。

正直疲れたので話題を変える事にした。

「ところでなんでこっちに留まってるんだ？」

「あ・・・それは・・・」

しまったと思った時にはもう遅かった。なんてデリカシーの無い事を言ってしまったのか。

「それが思い出せなくて」

「は？」

「私が死んだのは確か交通事故なんです。事故ショックで忘れてしまったのかも、でも何かやらなくちゃいけないと思ってたのでここに留まったんです」

「でもそれじゃ、ずっと用事を済ませられないじゃないか」

「断片的には覚えてるんですけど、雨の日の事故でした。私はなぜかうかれててそれで・・・」

メリーさんの目に涙が滲んできた、やはり地雷を踏んでしまったようだ。

後先考えず俺は慌ててこう言った。

「よかつたら手伝うよ」

「・・・本当に？」

「いいよ、暇だし」

女の子はいたわれと言う家訓だけじゃないだろう。それに他人の気がしないし、ほおって置けない。流されやすい僕だけどみずから流れに飛び込むことにした。

「ありがとう」

笑顔でそう言った時、彼女の頬を涙が流れた。髪の毛から垂れた水かもしれないけど柄にもなくドキッとしてしまった。その時、一階の玄関が開く音がした、親が帰ってきたのだろう。

「あ、そろそろ私は帰ります。これ以上お邪魔しちや悪いですし」

「ああ、また連絡してくれ」

「はい！それでは」

立ち上がるとメリーさんは窓の外へ消えていった。

僕は彼女のためにがんばって果たせなかった事を見つけてあげようと思った。

残ったマグカップとバスタオルを片付けようと立ち上がるとすうっとメリーさんが帰ってきた。

「あ、それとお茶ごちそうさまでした。アールグレイですよね？ものすごくおいしかったです。それでは」

僕は彼女のためにがんばって果たせなかった事を絶対に見つけてあげようと思った。